

佳作

お母さんのトリセツ

長野県 坂城町立南条小学校六年 岡本 洸樹

この本は、男の子がお母さんを自分の思い通りに動かそうと思ってお母さんの取扱説明書を作ろうとする話です。

ぼくが、この本を読んで思った事は、この本のお母さんは、うちのお母さんと似ていたり、少しちがったりするところがあるなと思いました。まず、似ているところは、この本のお母さんの口ぐせです。「やる事が先、やりたい事が後」と言うところです。例えば、ぼくがゲームをしたい時に、

「やる事が先、やりたい事が後。」
と言われます。その時、ぼくは、「やだな。ゲームを先にしたいな」と思います。

少しちがうところは、このお母さんは、きげんの良い時には、言うことを聞いてくれるけど、うちのお母さんは、きげんが良くてもたのみごつを聞いて

くれません。そんなお母さんがきげんがよくなる時は、ぼくが、宿題をやった時です。その時は、言うことを聞いてくれる時もあるけど、ゲームに関しては、何も聞いてくれないので、ぼくは、『かあちゃん取扱説明書』を作りたいたいなと思いました。取扱説明書^{マニュアル}はトリセツ。

トリセツを作って、言うことを聞いてくれるようにしたいです。だけど、ぼくのお母さんに、この本に書いてある、ほめる事をしてあまり意味がありませんでした。なので手伝いをもっと効果を上げるために、お母さんのよろこぶことを見つけて、かんさつしていきたいと思いました。

いまは、ぼくの気持ちを書いているだけだけど、お母さんもぼくのトリセツを頭の中にもっているかもしれません。なぜなら、ぼくのあつかい方がうまいからです。けっきょくぼくは、お母さんの言う事を聞いていて、洗面所そうじをしているし、宿題もしているからです。もしかして、お母さんは、ぼくだけじゃなくて、家族みんなのトリセツをもっているのかもしれない。家族みんなが、お母さんの言うことに従っているからです。でもトリセツなんていうと機械的に聞こえてしまうけど、人は、多かれ

少なかれ、気づかないうちに相手のことを見て、考えて、付き合っていくのかもしれませんが。人と人のつながりは、そんな簡単なものではなく、一人一人ちがう対応をしなければ、ならないからです。人は、トリセツであつかえるような機械のような簡単なものではないからです。

ぼくは、トリセツをほしいと思っていただけ、ぼくのお母さんには、トリセツというものは、通用しないので、トリセツというものは、けっきょくないものなのです。